

東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係 - 繩縄文土器との共伴事例から -

木 村 高

I はじめに

東北地方北部^{註1}（以下、北東北と表記。）における古墳時代前期^{註2}の土器は極めて少ないため、該期の土器様相の精緻な把握は非常に困難である。しかしながら、近年の発掘調査の進展により、該期の北東北における3系統の土器の存在だけはほぼ確実になってきた。これら3系統の土器とは、弥生系土器^{註3}、古式土師器^{註4}、繩縄文土器であるが、弥生土器から古式土師器への変換過程を明らかにする上で、弥生系土器と古式土師器の編年的位置を、細かい時間幅で明確にすることは、非常に重要な課題と言える。しかしながら、弥生系土器と古式土師器が共伴した事例は今のところ皆無であるため、この課題の解決には、全く違った視点による方法を用いなければならない。

先に挙げた3系統の土器の1つである該期の繩縄文土器は、型式名では後北C2・D式とされている。その分布の中心は北海道にあるが、弥生土器の終末期には、東北地方と新潟県域にも分布圏を拡大し、北東北の数遺跡において弥生系土器と東北地方の古式土師器である塩釜式（本論で言う塩釜式とは、北陸系・関東系などの、外来系を含む広義のものである）に共伴している。

前述の通り、弥生系土器と塩釜式の共伴事例は皆無であるものの、一方で後北C2・D式はこれら両者に共伴していることから、この事例を援用すれば、弥生系土器と塩釜式との時間的関係をある程度推定できる可能性がある。即ち、後北C2・D式という1型式内における内部変遷をまず把握し、弥生系土器に共伴した後北C2・D式と、塩釜式に共伴した後北C2・D式が、その内部変遷の中のどのあたりに位置するかを追究すれば、弥生系土器と塩釜式の時間的関係は相対的に明らかになるはずである。

このような視点に立って、本稿では、北東北における弥生系土器と塩釜式の時間的関係の明確化を中心課題とした試論を行う。また、その試論を進める過程において得られた事項を用い、東北地方と新潟県域における後北C2・D式の編年的位置についても若干言及したい。ただし、弥生系土器、塩釜式、後北C2・D式の良好な資料は現状において極めて少ないため、本稿はあくまでも現時点における想定を記した暫定的なものであり、以後、良好な出土事例の追加等によって訂正を加えていく内容のものである。

II 検討の方法

(1) 手順

まず、塩釜式と共に後北C2・D式を北海道の既存編年^{註5}に照らし合わせ、また、後北C2・D式と共に塩釜式を南東北の既存編年^{註6}に照らし合わせて、北東北出土の後北C2・D式と塩釜式の時期比定を行う。次にその結果を用いて、後北C2・D式と塩釜式の2つの編年の対応関係を確認する。さらに、その対応関係をもとにして、後北C2・D式と共に弥生系土器が塩釜式とどのような時間的関係にあるかを推定する。

今回、検討対象の中心として取り上げる遺跡は、後北C2・D式と弥生系土器が共伴した秋田県能代市寒川II遺跡、後北C2・D式と塩釜式が共伴した岩手県盛岡市永福寺山遺跡、後北C2・D式と塩釜式が出土した青森県五所川原市隠川(11)遺跡の3遺跡である。なお、北東北以外にも良好な共伴関係を示す遺跡はいくつかある^{註7}が、それらの遺跡の報告は概要報告の段階に留まっているため、今回は分

析対象に含めない。

では以下に、本稿において基準とする、後北C2・D式と塙釜式の既存編年の採択理由とそれを用いるまでの手続き等について述べる。

(2)後北C2・D式土器

北東北出土の後北C2・D式は、破片資料がほとんどであるため、北東北出土資料のみを用いた変遷過程の明確化は、現段階では無理である。しかし、いくつか知られている復元個体を巨視的に観察すれば、その文様構成の変遷は、北海道出土の資料と基本的にはほぼ同様であると考えられる。こういったことから、北東北出土資料の編年的位置を確定するにあたっては、北海道における既存編年に対比させる方法が現状において最適である。

北海道における後北C2・D式の編年については、1980年代以降に限定すると、これまでに大沼忠春（大沼1982, 89, 97）、石本省三（石本1984）、大島秀俊（大島1991）、上野秀一（上野1992）、鈴木信（鈴木1998）らの研究があるが、いずれの編年も大沼による1982年の編年を基本にしていると思われる。よって、ここでは、大沼編年（大沼1982）を基準編年として用いることにする。

大沼による後北C2・D式の変遷は4段階に分けられており、その細分型式名と変遷過程は、「C2式初」→「一般的なC2・D式」→「C2・D式後葉」→「C2・D式末」というものである。

ところで、大沼編年の後北C2・D式の第2段階にあたる「一般的なC2・D式」は、上野秀一によりさらに「古」と「新」の2段階に細分されている（上野ほか1987、上野1992、1994）。「古」の基準資料は、北海道札幌市K135遺跡4丁目地点出土のVII1群土器であり、「新」の基準資料は、同遺跡出土のVII2群土器である（図1）。VII1群土器とVII2群土器は、層位的に分離されたもので、VII1群土器は、VIIc層から、VII2群土器はそれより上層のII～V層から出土したものである。上野によるこれらの「古」と「新」の細分は、この層位的事実と、復原個体の全体文様構成の分類に基づいて行われたものである。

本稿ではこの層位的事実に裏付けられた新古の細分を、大沼による後北C2・D式の変遷に組み込み、後北C2・D式の変遷を全体で5段階と捉える。即ち、「C2式初」→「一般的なC2・D式」（古）→「一般的なC2・D式」（新）→「C2・D式後葉」→「C2・D式末」とする。

ただし、3点ほど問題がある。それは、本稿で扱う資料における「一般的なC2・D式」を「古」と「新」に分離しようとしても、破片資料が主体であるため、上野によるこの細分を簡単には適応させ難いことである。また、K135遺跡4丁目地点の資料は、大型の深鉢が多いことから、住居内で使用された可能性が高いものと思われるが、今回扱う資料は、土壙墓に伴ったもの、あるいはその可能性の高いものである。加えて、それらは、小型深鉢や注口付深鉢などが比率として高いが、このような小型の土器は、文様帶の圧縮や単位の欠落があるため、文様構成を系統別に分類するには問題がある（鈴木1998）。

これらのこと考慮すると、上野が行ったような文様構成の分類をもとにした「古」と「新」の分離法は今回扱う資料に適応させるのはかなり難しい。こういった状況から、今回扱う資料を「古」と「新」に分離するにあたっては、文様構成以外の情報も生かすことが必要となる。その場合には、1つの個体の中ではほぼ均一に全周している要素が望ましい。この点から、先ず第一に口縁部の形態を重視することとし、補足的に、部分的に残る文様要素のあり方を観察した上で、時期比定するといった方法を採る。

※ 本稿では、後北C2・D式の時間差を感覚的に理解しやすいよう、大沼編年で用いられている4段階の細分型式の各

名称を、便宜的に第1段階～第4段階に呼びかえる。つまり、「C2式初」＝第1段階→「一般的なC2・D式」＝第2段階→「C2・D式後葉」＝第3段階→「C2・D式末」＝第4段階、と表記する。また、上野による第2段階の「古」を「第2段階-1」に、第2段階の「新」を「第2段階-2」と表記する。さらに、「微隆起線に縁取られた帶縄文」という表現も簡略化したいため、このような2つの要素で構成される文様を、便宜的に「隆線帶縄文」と表記し、微隆起線の縁取りのない帶縄文を「無線帶縄文」と表記する。



図1 K135遺跡・4丁目地点出土土器（一部）

【「古」と「新」の分離方法】K 135 遺跡 4 丁目地点のⅦ 1 群土器とⅦ 2 群土器の口縁部形態を巨視的に見ると、口唇部直下に刻目貼付帯が 1 条巡るタイプ（以下、これを 1 条タイプと表記。）と口唇部直下に刻目貼付帯が 2 条巡るタイプ（以下、これを 2 条タイプと表記。）、そして刻目貼付帯が全く付されないタイプ（以下、これを 0 条タイプと表記。）の 3 種類が見られる^{註6}（図 2）。ここでは、これら 3 種類の口縁部形態のうち、1 条タイプと 2 条タイプに注目する。

K 135 遺跡 4 丁目地点Ⅶ 1 群土器の、口縁部を有する復元個体全体における 1 条タイプと 2 条タイプの資料の合計個体数は 33 点で、うち、1 条タイプは 31 点（93.9%）を占め、2 条タイプはわずか 2 点（6.1%）

のみという構成比を示す。一方、Ⅶ 2 群土器の口縁部を有する復元個体全体における 1 条タイプと 2 条タイプの資料の合計個体数は 24 点であり、1 条タイプは 18 点（75.0%）みられ、2 条タイプは 6 点（25.0%）という構成比を示す（表 1・グラフ 1）。このように、「一般的な C2・D 式」の「古」と「新」の間には、口縁部形態の構成比に差がみられ、時期が新しくなるにつれて 2 条タイプの増加している可能性が指摘できる^{註7}。このことから、「一般的な C2・D 式」を「古」と「新」に分離するにあたっては、この構成比を積極的に参考としながら、残存する部分的な文様要素にも判断材料を求めることがある。なお、本稿では、口縁部破片を扱う場面が少なくないことから、ここでは便宜的に、構成比を求める際には、1 点の破片資料を大小にこだわらず、機械的に 0.1 個体と数えることにし、接合した破片資料は、その状態で 0.1 個体と数える^{註8}。口縁部を十分に有す復元個体は 1 個体と数える。

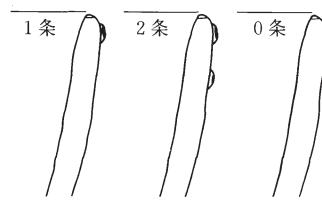
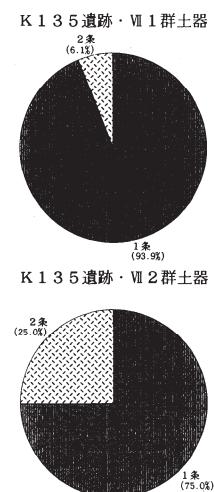


図 2 口縁部形態の各タイプ模式図

表 1 K 135 遺跡 4 丁目地点

後北 C2・D 式	総点数	1 条タイプ		2 条タイプ	
		点数	比率	点数	比率
Ⅶ 1 群土器	完形 33	31	93.9	2	6.1
Ⅶ 2 群土器	完形 24	18	75.0	6	25.0



グラフ 1 1条タイプと2条タイプの構成比

(3) 塩釜式土器

氏家和典によって設定された塩釜式（氏家1957）の変遷については、氏家（氏家1972）、丹羽茂（丹羽1985）、田中敏（田中1987）、次山淳（次山1992）、辻秀人（辻1993, 1994, 1995）らの研究がある。これらの編年の中で、辻による編年（辻1993, 1994, 1995）は、丹羽、田中、次山の研究成果をまとめつつ、塩釜式以前の古式土師器についても言及しており、さらに、他地域における編年との対応関係にも触れている。これらの点から、本稿では、辻編年（辻1994, 1995）を基準編年として用いることにする。

辻による塩釜式の変遷は、6 段階に分けられており、その細分名と変遷過程は「Ⅱ-1 期」→「Ⅱ-2 期」→「Ⅲ-1 期」→「Ⅲ-2 期」→「Ⅲ-3 期」→「Ⅲ-4 期」というものである。また、塩釜式最古の時期であるⅡ-1 期より以前には、「Ⅰ-1 期」と「Ⅰ-2 期」の 2 つの段階が設定されている。各段階の畿内地方との対応関係については、Ⅰ-1 期とⅠ-2 期が、「庄内式の新しい段階」に、Ⅱ-1 期とⅡ-2 期が「布留式の古い段階」に並行するとされている（辻1995）。

【畿内編年との対応関係】辻編年のⅡ-1 期は、辻によれば、次山編年の「1 段階」にほぼ相当し、次山によれば、次山編年 1 段階は、寺沢薰による近畿地方（大和）編年（寺沢1986）の「布留 0 式」の「新しい内容をもつ段階と対応」する（次山1992）。よって、辻の言う通り、Ⅱ-1 期とⅡ-2 期は「布留式の古い段階」に並行すると言えるが、寺沢の「布留 0 式」は、米田敏幸による近畿地方（河

内) 編年 (米田1992) に対比させた場合、「庄内式期IV」に相当するようである (寺沢、米田とも纏向遺跡辻土坑4下層資料を基準資料の一部にあてている)。このことから、辻編年のII-1、2期は、米田編年の庄内式期IVの新しい段階と、「庄内式期V/布留式期I」にほぼ対応することになるか。

しかし、辻編年のII-1、2期は、辻によれば、田嶋明人による北陸地方(南西部)の漆町遺跡編年(田嶋1986)との対比において、漆7群に相当するとされ(辻1995)、米田は、漆7群を米田の言う庄内式期IVにほぼ対応させている(米田1994a)。

表2 辻編年と各地域における編年との対比

米田編年 (1992, 94a)	田嶋編年 (1986)	辻編年 (1994, 95)	次山編年 (1992)	寺沢編年 (1986)	米田編年 (1992)
				布留0式	庄内式期IV
庄内式期IV	漆7群	II-1期 II-2期	1段階		
庄内式期V 布留式期I	漆8群	III-1期			

このように、辻編年を畿内編年に対応させる際、寺沢編年に直結させて米田編年に対応させた場合と、田嶋編年を介して米田編年に対応させた場合とでは、若干のずれが生じる。要するに、各地域との対応関係は、細かい部分においてまだ問題が残されているものと思われるが、田嶋による漆町編年は、米田編年と非常によく一致している(米田1994a)という事実を重視し、本稿における、辻編年のII-1、2期の位置については、北陸編年を介して畿内編年に対応させた場合を採用しておきたい。即ち、辻編年II-1、2期は米田の庄内式期IVと対応し、その後段階の辻編年III-1期は庄内式期V/布留式期Iに対応するものとして捉えておく。なお、本稿では、記述の明瞭化を図るために、庄内式、布留式の呼称は、便宜的に全て米田編年に倣うこととする^{註9}。

III 各遺跡出土資料の検討

(1) 寒川II遺跡(図3)

【遺跡の概要】秋田県能代市に所在する寒川II遺跡からは、後北C2-D式期の土壙墓が6基検出され、土器は第2号から第6号までの5基の土壙墓から出土している^{註10}(図3)。第2号土壙墓の埋土の上層、溝〈SD71〉に攪乱された部分からは、数個体分の後北C2-D式の破片(1~6)が出土し、壙底東側のピット上と袋状ピット内からは弥生系土器である無文の鉢形土器(8)と羽状撲糸文の施される壺形土器(7)が出土している。溝〈SD71〉に攪乱された部分から出土した後北C2-D式は、第2号土壙墓出土土器として報告されている(小林ほか1988)。

【後北C2-D式土器の編年位置】5基の土壙墓から出土した後北C2-D式は、いずれも曲線状の隆線帶縄文を効果的に組み合わせた文様構成を持つものが主体的で、底部は全て平底であることから、それら全体の資料間に大きな時間差は看取されず、大枠ではほぼ第2段階に位置づけられる。では、5基の土壙墓から出土した後北C2-D式の全体および第2号土壙墓出土の後北C2-D式における1条タイプと2条タイプのあり方について概観してみる。

壺形土器が副葬されていた第2号土壙墓に伴う後北C2-D式は、全て破片であるが19片ほど出土している。そのうち、口縁部破片は5片(1~5)あり、1点のみは1条タイプ(3)で、ほかは全て2条タイプ(1、2、4、5)である。第3号から第6号の4基の土壙墓資料を見ると、第4号土壙墓資料(10)と第5号土壙墓資料(16)の2点の口縁部が2条タイプ、第5号土壙墓資料(14)と第6号土壙墓資料(19)の2点の口縁部が0条タイプである以外は全て1条タイプで占められる。第2号土壙墓の口縁部破片資料を加えた1条タイプの全点数は6.1点を数え、1条タイプは寒川II遺跡の主体を占めていることが分かる。

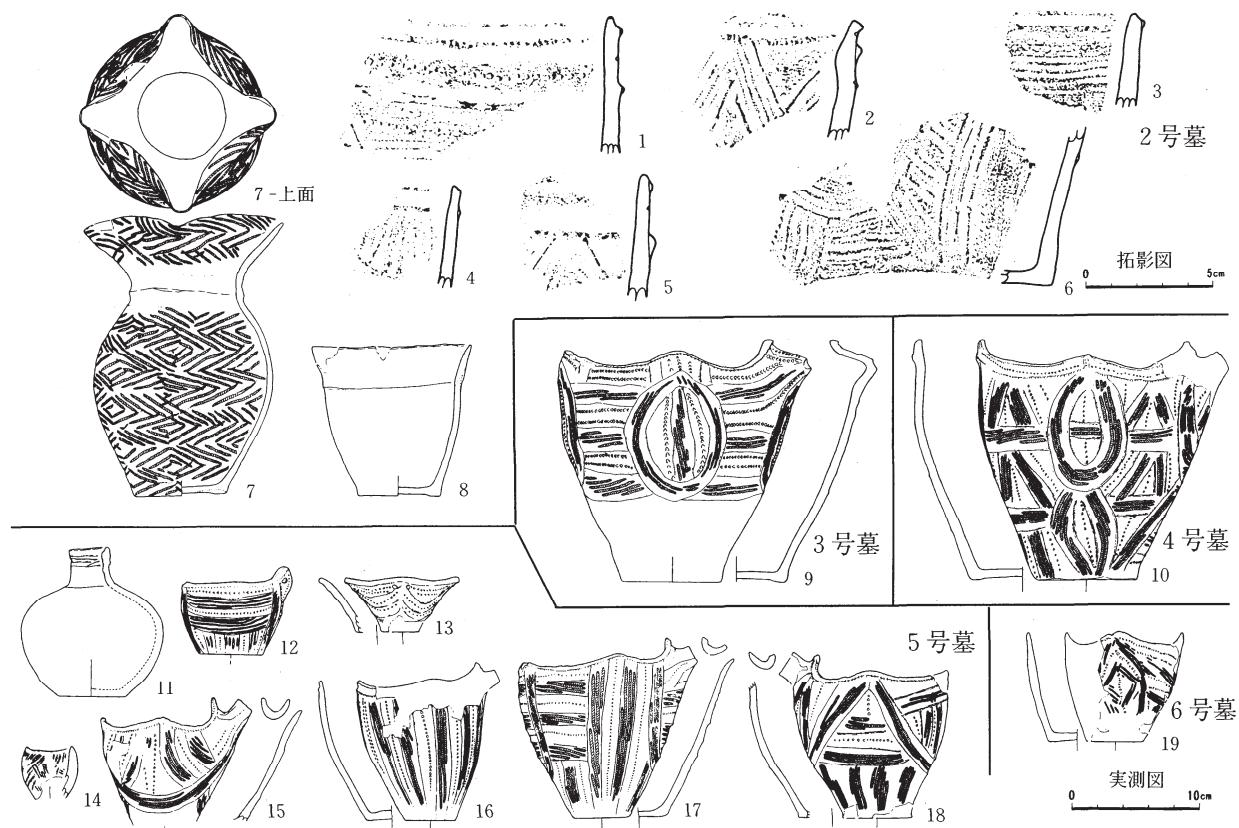


図3 寒川II遺跡・出土土器 (一部)

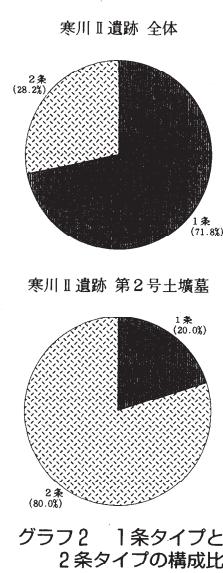
以上、5基の土壙墓から出土した後北C2・D式の全個体および第2号土壙墓出土の後北C2・D式における1条タイプと2条タイプのあり方について概観した。これらのことまとめたものが表3である。

表3 寒川II遺跡

5基の土壙墓から出土した後北C2・D式全体の1条タイプと2条タイプの構成比は、71.8%と28.2%を示し、また、第2号土壙墓出土の5片の後北C2・D式における1条タイプと2条タイプの構成比は、20.0%と80.0%を示す。5基の土壙墓から出土した後北C2・D

土壙墓番号	総点数	1条タイプ		2条タイプ	
		点数	比率	点数	比率
第2号土壙墓	口縁 0.5	0.1	20.0	0.4	80.0
第3号土壙墓	完形 1	1	100.	—	—
第4号土壙墓	完形 1	—	—	1	100.
第5号土壙墓	完形 6	5	83.3	1	16.7
第6号土壙墓	—	—	—	—	—
合計	8.5	6.1	71.8	2.4	28.2

式全個体について、グラフ2をもとにこの結果を巨視的に見れば、K135遺跡4丁目地点のⅦ2群土器、即ち、第2段階-2の資料の口縁部形態の構成比に近似していることが分かる。一方、第2号土壙墓から出土した後北C2・D式の構成比グラフでは、K135遺跡4丁目地点のⅦ2群土器、即ち、第2段階-2における1条タイプと2条タイプの構成比が逆転した状態に近い。しかし、これら4片の2条タイプの口縁部破片における2段目の貼付帯は、1段目の貼付帯よりも約2cmほど下に位置しており、通常とは異なったつくりのものである。寒川II遺跡からこういった口縁部をもつ資料は、他に出土していないが、K135遺跡4丁目地点のⅦ1群土器（第2段階-1）の中に見られる（図1-4）。また、第5号土壙墓から出土している小型の鉢（13）は、K135遺跡4丁目地点Ⅶ2群土器（第2段階-2）の中にやや類似したものが2点ほど（図1-11、12）見いだせる。



グラフ2 1条タイプと2条タイプの構成比

ところで、K135遺跡4丁目地点Ⅶ1群土器を破片資料も含めて概観すると、口唇部直下に縦位、斜位、弧状に、3条1単位あるいは2条1単位で構成される、並行した短い微隆起線(以下、短並行微隆起線と表記。)を持つものが7点ほど含まれている(図1-2、3など)ことが分かる。しかし、同遺跡のⅦ2群土器全体の中に、この文様要素は全く存在しない。この短並行微隆起線は、後北C1式によく見られ、後北C2・D式第1段階の基準資料(北海道七飯町聖山遺跡KⅢ群土器)にも認められることから、この短並行微隆起線は後北C1式から後北C2・D式の第2段階-1まで継続し、第2段階-2以降は消滅した可能性が高いと言える。

寒川Ⅱ遺跡の資料はあくまでも土壙墓に伴ったものであることから、各土壙墓間にはある程度の時間差を想定することができる。そのように考えた場合、第3号土壙墓資料(9)には、短並行微隆起線が施されていることから、本資料は第2段階-1に属す可能性が高く、また、同土壙墓は本遺跡における墓域形成の初期段階に位置している可能性もある。このようなことなども考え合わせると、これら寒川Ⅱ遺跡の後北C2・D式の全体は、編年的には、第2段階-1の後半から、第2段階-2を中心とした時期に位置づけられる可能性が考えられる。

(2) 永福寺山遺跡(図4)

【遺跡の概要】 岩手県盛岡市に所在する永福寺山遺跡からは、後北C2・D式期の土壙墓が7基検出され、各土壙墓からは後北C2・D式と塩釜式が出土している(3~46)。これらの中の土壙墓5(13~29)と土壙墓7(34~46)の2基からは、破片ではあるが、まとまった量の後北C2・D式と塩釜式が出土している(津嶋ほか1997)。

【塩釜式土器の編年的位置】 調査報告書では、出土した後北C2・D式土器を「中段階」(K135遺跡4丁目地点出土Ⅶ2群土器の時期)に、古式土師器を「塩釜式新段階」(辻編年Ⅲ期)に位置付け、両者が並行関係にあると結論づけている(津嶋ほか1997)。同遺跡の塩釜式を辻編年Ⅲ期に位置づけた根拠は、主として福島・宮城県域の遺跡から出土した塩釜式との類似性にあるが、永福寺山遺跡出土のこれら塩釜式の大半は破片であるため、辻編年Ⅲ期という大枠での位置づけはやむを得ない結果と言える。しかし、辻編年Ⅲ期という大枠での位置付けであれば、塩釜式と「共伴もしくは並行関係」を有す後北C2・D式の、塩釜式に対する編年的位置も大枠でしか捉えることができなくなる^{註11}。よって、ここでは、破片であっても特徴的な要素を明瞭に残している資料として、口縁部に円形浮文の付される壺^{註12}(1)と口縁部に縦位棒状浮文の付される壺^{註13}(2)、そして土壙墓7から出土している頸部下位の屈曲部に横位隆帯の付される壺(46)の3点の資料に注目し、辻編年Ⅲ期のどのあたりに位置づけられるものか検討してみたい。

辻編年において提示されている壺形土器の中で、口縁部に縦位棒状浮文の付されるものは、形態がやや異なるものの、I-2期からⅢ-1期にまで見られ、Ⅲ-2期以降には見られない。また、頸部下位の屈曲部に横位隆帯の付される壺は、形態がやや異なるものの、I-2期からⅡ-2期にまでみられ、Ⅲ-1期以降には見られない。これらのことから、縦位棒状浮文と横位隆帯の2種の文様要素は、少なくともⅢ期の後半には存在していないものと考えられる。ただし、辻編年において提示されている壺形土器の中に、口縁部に円形浮文の付される壺は含まれていないため、このような壺が、畿内・東海・関東・北陸地方ではどのような編年的位置にあるのかを以下に確認してみたい。

【畿内】 石野博信は、纏向遺跡の編年の中で、口縁部に円形浮文の付される壺を、「壺A」の「A1」と「A3」に該当させ、「壺A1」を「纏向1式」(庄内式期I)から「纏向4式」(庄内式期V/布留式期I)に、「壺A3」を「纏向1式」から「纏向3式」(庄内式期Ⅲ~Ⅳ)に位置づけている。なお、「纏向4式」の「壺A3は確実な例は見当た

らない」ことから、「この時期には消滅した」可能性を指摘している。また、「纏向4式」(庄内式期V/布留式期I)の説明の中で、「この壺は辻土壙4下層では出土せず、はたしてどの程度纏向4式まで残存するのかはわからない」と述べている(石野1976)。

寺沢薰は、矢部遺跡の編年の中で口縁部に円形浮文の付される壺を、「大和における古式土師器の編年細分(1)」の付図において、「広口壺E」と「二重口縁壺㊱(小型)」の系統の中に位置づけ、「広口壺E」は、「庄内0式」(庄内式期I)のみに、そして「二重口縁壺㊱(小型)」は「庄内0式」から「布留1式」(庄内式期V/布留式期I)に該当させている。なお、「布留1式」の「二重口縁壺は加飾性のあるものが激減し、無文のものが定型化して盛行」すると述べている(寺沢1986)。

[東海] 赤塚次郎は、廻間遺跡の編年(赤塚1990)の中で、口縁部に円形浮文の付される壺を、「廻間式土器編年表」と「壺Aの変遷」において、廻間I式2段階(廻間遺跡3期:庄内式期I)の「壺A1」(パレス壺)と廻間III式2段階(廻間遺跡8期:庄内式期V/布留式期I)の「壺E」(二重口縁壺)に、位置づけている。なお、「廻間式土器編年表」の中で、壺形土器の口縁部に付される円形浮文以外の円形浮文は、廻間I式3段階の高坏の口縁部と、廻間I式1段階の「壺B」の肩部に見られる。

[関東] 比田井克仁による編年(比田井1991, 1994)の中において、口縁部に円形浮文の付される壺は、直接的には提示されていないが、比田井は千葉県市原市に所在する神門3・4・5号墳の性格を検討する過程で、各古墳の時期を「南関東前期I段階古相」から「I段階新相」に位置付け、5号墳出土の高坏を「廻間I式4段階もしくは廻間II式1段階相当」(庄内式期II)に、4号墳出土の高坏と小型高坏・器台を「廻間II式前半相当」(庄内式期II~III)に

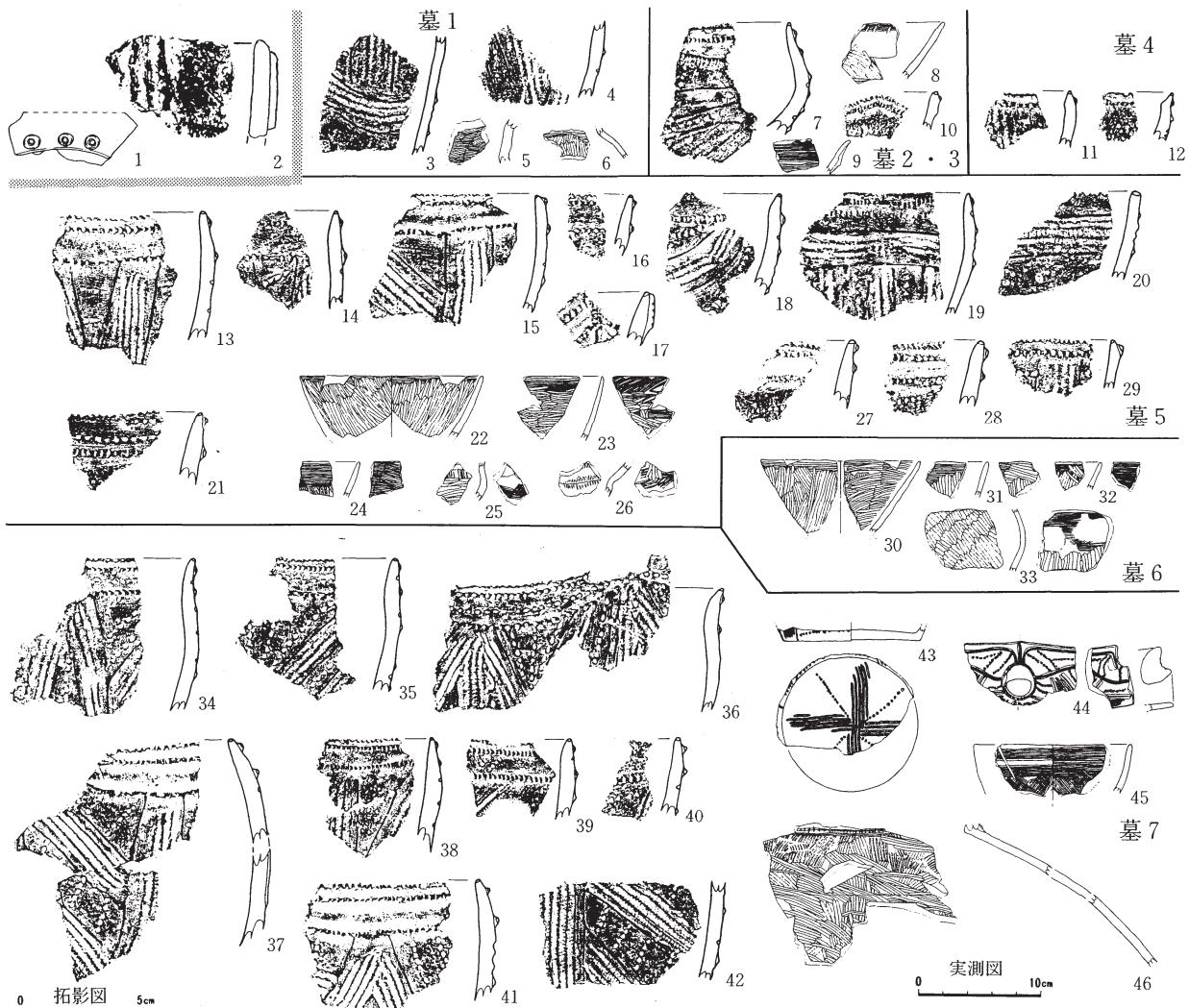


図4 永福寺山遺跡・出土土器(一部)

位置づけている（比田井1997b）。これら5号墳、4号墳には、口縁部に円形浮文の付される壺が伴っている。

[北陸] 田嶋明人による漆町遺跡の編年（田嶋1986）の中で、口縁部に円形浮文の付される壺形土器は、「漆町5群」（庄内式期II）の中に見られ、また、谷内尾晋司による編年（谷内尾1983）では、「古府クルビ式」（漆町7群：庄内式期IV）の中に見られる。

以上、畿内・東海・関東・北陸地方における、口縁部に円形浮文の付される壺の編年的位置を概観してみた。結果をまとめれば、このような壺形土器は主に庄内式期に特徴的で、庄内式期V/布留式期I（辻編年III-1期）にもわずかに残存していることが理解できる。

では再び永福寺山遺跡の塩釜式の問題に戻る。前述の通り、報告書においてこれらの塩釜式は、辻編年III期として位置づけられたが、辻編年における提示資料の内容と他地域における編年の内容を確認した結果、口縁部に円形浮文の付される壺と口縁部に縦位棒状浮文の付される壺の最終段階は、辻編年III-1期にあるようである。よって、頸部の屈曲部に横位隆帯の付される壺もほぼ同じ時期に存在したものと考えられ、これら永福寺山遺跡の口縁部に円形浮文の付される壺、口縁部に縦位棒状浮文の付される壺、頸部の屈曲部に横位隆帯の付される壺は、辻編年III期の中でも1期あたりに位置づけられる可能性がある。ただし、口縁部に円形浮文の付される壺は、庄内式期V/布留式期Iの時期においてはかなり減少している状況（石野1976・寺沢1986）を考慮すれば、これらの塩釜式は、辻編年III-1期の古い段階に位置づけられる可能性が考えられる¹⁴。

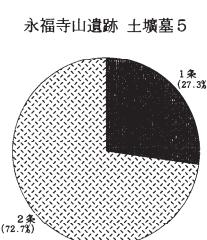
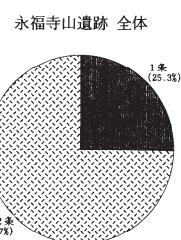
【後北C2・D式土器の編年位置】 後北C2・D式の大半は細片資料であり、時期決定が困難であるものの、「円環状のモチーフがないこと…（中略）…キザミを加えた隆線が2本のものが多いこと…（中略）…K135遺跡4丁目地点VII2群土器に様相が近い」（津嶋ほか1997）という記述通り、大半が2条タイプの口縁部で占められ、1条タイプのものはごくわずかである。この状況をまとめたものが表4である。

表4 永福寺山遺跡

土壙墓番号と出土地点	総点数	1条タイプ		2条タイプ	
		点数	比率	点数	比率
土壙墓1	—	—	—	—	—
土壙墓2・3	口縁 0.2	0.1	50.0	0.1	50.0
土壙墓4	口縁 0.2	0.2	100.	—	—
土壙墓5	口縁 1.1	0.3	27.3	0.8	72.7
土壙墓6	—	—	—	—	—
土壙墓7	口縁 0.9	—	—	0.9	100.
土壙墓合計	2.4	0.6	25.0	1.8	75.0
トレンチ	口縁 3.6	1.1	30.6	2.5	69.4
採集土器	口縁 1.5	0.2	13.3	1.3	86.7
全体合計	7.5	1.9	25.3	5.6	74.7

永福寺山遺跡から出土した後北C2・D式全体（トレンチ出土資料・採集資料含む）の1条タイプと2条タイプの構成比は、25.3%と74.7%を示し、グラフ3で巨視的に見れば、K135遺跡4丁目地点のVII2群土器、即ち、第2段階-2における1条タイプと2条タイプの構成比が逆転した状態にほぼ等しい。また、1条タイプと2条タイプの両方の後北C2・D式が出土している土壙墓5の構成比グラフも、上記の結果と非常に近似している。このことから、これら2つの結果は、永福寺山遺跡全体の特徴を良く表しているものと捉えることができる。

K135遺跡4丁目地点資料に見られるように、第2段階-1においては1条タイプが数量的に圧倒的であって、第2段階-2以降、2条タイプが増加傾向にあるならば、これら全体としての永福寺山遺跡の資料は、第2段階-2以降として位置づけられることになろう。しかし、図示資料以外の資料の文様構成を見てみると、土壙墓7から出土している胴部破片の中には、曲線状の隆線帯縄文を持つものがみられ、また、トレンチから出土している底部破片は上げ底を呈しており、加えて、同土壙墓出土の注口土器（44）の丁寧なつくりから見れば、これらの資料は少なくとも第3段階まで降ることはないものと考えられる。従って、これら永福寺山遺跡の資料は、第2段階-2の終末あたりに位置する可能性が考えられる。



グラフ3 1条タイプと2条タイプの構成比

(3) 隠川(11)遺跡^{註16} (図5)

【遺跡の概要】 青森県五所川原市に所在する隠川(11)遺跡からは、後北C2・D式と塩釜式が出土している。弥生系土器は出土していない。本遺跡における後北式期の遺構は検出されなかったものの、後北C2・D式と塩釜式は耕作土(搅乱層)である第Ⅰ層と無搅乱層である第Ⅱ層から出土しており、それらは平面的に約25×35mの限定された範囲に重複して分布している。第Ⅰ層出土の後北C2・D式と塩釜式は、本来、第Ⅱ層の遺物と同レベルに存在していて、その後、現代の耕作によって浮上したものと考えられる。これら後北C2・D式と塩釜式は、その出土層位より、共伴関係にあるものとは断言できないが、両者とも単独で出土することさえも極めて稀である上に、平面的なまとまりをもって出土している状況から、これら両者間に大きな時間差を持たせて考えることは難しい^{註16}。このような状況から、これら後北C2・D式と塩釜式は、共存したものと考えた方が自然である。よって、ここではこれらが並行関係にあるものと判断し、以下に述べる。

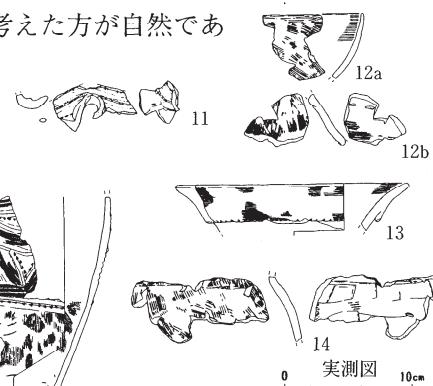


図5 隠川(11)遺跡・出土土器(一部)

【塩釜式土器の編年的位置】 第Ⅰ・Ⅱ層出土の塩釜式は、全て破片資料であるが、少なくとも4個体あり、器種毎の内訳は、壺形土器2点、高坏形土器1点、甕形土器1点である。2点の壺形土器の口縁部形態は、いずれも複合口縁であり、うち、1点の口縁部の内面には赤彩が施され、もう1点(13)の複合口縁部の下端には、刻目が施されている。また、高坏形土器(12a、12b)は、脚部内面を除いて全面に赤彩が施されるもので、ミガキは口唇部外面直下にのみ顯著で、外面のほぼ全体にハケメが意図的(?)に残されている。甕形土器(14)は、口縁部を欠失しているが、外面に粗いハケメが観察される。

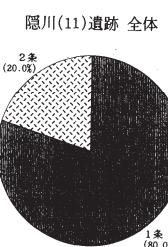
これら塩釜式の全体器形の完全な把握は不可能であるものの、壺形土器の複合口縁部下端の刻目の存在および高坏形土器の器面調整のあり方、そしてその坏部のやや碗型を呈する器形から、およそ庄内Ⅳ式期の後半あたりから庄内式期V/布留式期Iの初頭あたりに並行するものと判断され^{註17}、ほぼ辯年Ⅱ-2期に相当する^{註18}と考えられる。

【後北C2・D式土器の編年位置】 第Ⅰ・Ⅱ層出土の後北C2・D式も破片資料が主体であるが、8~9個体あるものとみられる。部分的な文様構成を概観すると、全て第2段階に位置づけられるものと考えられるが、曲線状の文様構成を持つものは少なく直線的なものが多い^{註19}。また、帶縄文間に施される刺突の形状をみると、三

角形やD字形、円形のものや紡錘形のもの等、種類に富んでいる。このような特徴から、これらの後北C2・D式は、第2段階の中でも時間的に新しい様相をうかがわせるが、口縁部形態に注目すると、注口土器1個体のみが2条タイプで、ほかは全て1条タイプのものである。

表5 隠川(11)遺跡

出土地点	総点数	1条タイプ		2条タイプ	
		点数	比率	点数	比率
第Ⅰ・Ⅱ層	口縁 1.5	1.2	80.0	0.3	20.0



グラフ4 1条タイプと2条タイプの構成比

これら後北C2・D式の口縁部破片の全体における1条タイプと2条タイプの構成比についてまとめたものが表5である。1条タイプと2条タイプの構成比は80.0%と20.0%を示し、グラフ4で確認すれば、2条タイプが全体の4分の1以下となっており、K135遺跡4丁目地点のⅦ1群土器とⅦ2群土器における構成比の中間的な状態を示す。よって、これら隠川(11)遺跡出土の後北C2・D式の全体は、ほぼ第2段階-1と2の中間に位置づけられる可能性が考えられる。

VII 弥生系土器の編年的位置

以上、寒川Ⅱ、永福寺山、隠川(11)の3遺跡から出土した後北C2・D式と塙釜式の編年的位置について検討した。結果を整理すると、寒川Ⅱ遺跡の後北C2・D式は、ほぼ第2段階-1の後半から第2段階-2に、永福寺山遺跡出土の後北C2・D式は、第2段階-2の終末あたりに、そして、隠川(11)遺跡出土の後北C2・D式は、ほぼ第2段階-1と2の中間に位置づけられる可能性が考えられる。

また、永福寺山遺跡出土の塙釜式はⅢ-1期の古い段階に、隠川(11)遺跡出土の塙釜式はほぼⅡ-2期に位置づけられると考えられる。

これらのことから、隠川遺跡の事例より、後北C2・D式の第2段階-1と第2段階-2の中間に塙釜式Ⅱ-2期が対応し、また、永福寺山遺跡の事例より、後北C2・D式第2段階-2の終末に塙釜式Ⅲ-1期の古い段階が対応すると考えられる。では、後北C2・D式第2段階-1の始まりは古式土師器の編年のどのあたりに対応するのであろうか。このことを確認するために、新潟県西山町に所在する内越遺跡の事例を見ておきたい。

内越遺跡では、住居跡の覆土から弥生時代終末の塙崎Ⅰ式土器(畿内第V様式末期)と「後北C1式の新しいもの」と報告された資料が共伴^{註20}している(大森ほか1983)。この「後北C1式」は破片であるが、施されている文様要素は、北海道七飯町に所在する聖山遺跡出土のKⅢ群土器と類似しており、後北C2・D式の第1段階に位置づけられる(木村1994)。

この事例から、後北C2・D式第1段階は、畿内第V様式の末とほぼ並行し、後北C2・D式第2段階-1の始まりは、おおよそ庄内式期Ⅰのあたりにあるものと考えられる。よって、前述の内容も加えれば、後北C2・D式第2段階-1は、庄内式期Ⅰから庄内式期Ⅳのあたりにはほぼ並行する可能性が高く、後北C2・D式第2段階-1の後半から第2段階-2に位置づけられる寒川Ⅱ遺跡は、ほぼ辻編年Ⅰ-2期からⅢ-1期の古い段階に並行するものと捉えられる。

ところで、寒川Ⅱ遺跡の第2号土壙墓から出土した羽状撚糸文壺形土器は、十王台式の系譜上に属するものと考えられるが、十王台式の変遷については鈴木素行により5段階に分けられており、その型式名と変遷過程は、「十王台1a式」→「十王台1b式」→「十王台1c式」→「十王台2a式」→「十王台2b式」というものである(鈴木1992,1994)。この鈴木編年を念頭に置きつつ関東地方の古墳時代の土器編年を概観すると、比田井克仁は、十王台2a式(千葉県佐倉市大崎台遺跡第230号住居址出土資料)を比田井編年Ⅰ段階古相(庄内式期Ⅰ・Ⅱ)に位置付け(比田井1994)、茨城県域における塙谷修による編年では、十王台2b式(茨城県東海村部原北遺跡第2号住居跡出土資料)を比田井編年Ⅰ段階古相(庄内式期Ⅰ・Ⅱ)に位置づけている(古墳時代研究会1997 P87)。このことから、十王台2a式と2b式は庄内式期Ⅰ~Ⅱの時期に存在している可能性がうかがえる。

寒川Ⅱ遺跡の壺形土器は、類例の不足から型式学的にはその編年的位置を明確に定められないものの、かなり変容した器形と文様のあり方を退化した状態と捉えた場合、十王台式の変遷過程の中においては終末の資料よりもさらに後出のものと見なされよう。そのような見地からこの資料の編年的位置を想定すれば十王台2b式より後出のものと捉えられ、先に述べた比田井編年の内容から、庄内式期ⅢかⅣにおおよそ並行している可能性が高いと考えられる。このことと、先述の寒川Ⅱ遺跡の後北

C2・D式全体の資料が辻編年I-2期からIII-1期の古い段階にあるという検討結果との間に大きな矛盾は生じない。これらの2つの事項の重複する部分を採用すれば、寒川II遺跡の第2号土壙墓の羽状撲糸文壺形土器（弥生系土器）は、辻編年I-2期からII-2期あたりに存在している可能性が高く、即ち、塩釜式II-1期を前後する時期に並行していると考えられる。

V 広域編年（今後の展望）

以上、寒川II、永福寺山、隠川(11)、内越の4遺跡における共伴事例をもとに、後北C2・D式第1段階と第2段階-1、第2段階-2の古式土師器に対する位置が把握できたが、ここではその後の段階の後北C2・D式の編年的位置についても若干考えてみたい。

上記4遺跡以外において、後北C2・D式が古式土師器と共に伴した事例としては、宮城県築館町伊治城跡が挙げられる。伊治城跡（佐藤1992）では、S D260、261溝の覆土（大別1層下部から2層の上面）において、北大I式^{註21}と後北式に属する可能性のある破片が丹羽編年第II段階の塩釜式と共に伴している。「後北式に属する可能性」のある資料は、後北C2・D式第4段階に比定されるものであることから、同遺構から出土した北大I式は、後北C2・D式第4段階と一時的に並行する最古段階の資料として考えられる（木村1994）と同時に、この後北C2・D式は第4段階の中でもさらに新しい段階に位置づけられる。

また、丹羽編年第II段階に位置づけられた塩釜式は後に、岩見和泰によって辻編年III-3期に位置付けられている（岩見1993）。

表6 古式土師器と縦縄文土器の対応表

古式土師器					縦縄文土器	共伴例
畿内 (河内) 米田	東海 (濃尾平野) 赤塚	北陸 (南西部) 田嶋	関東 (南部) 比田井	東北 (南部) 辻	縦縄文土器	
第V様式期						第1段階 内越
庄内式期I	廻間I式0~2	漆3・4群				---
庄内式期II	廻間I~II式	漆5群	I段階古	I-1期		第2段階 -1 寒川II 隠川(11)
庄内式期III	廻間II式2~3	漆6群	I段階新	I-2期		
庄内式期IV	廻間II~III式	漆7群		II-1期 II-2期		
庄内式期V 布留式期I		漆町8群		III-1期		第2段階 -2 永福寺山
	廻間III式2~3		II段階			
布留式期II		漆町9群		III-2期		第3段階
布留式期III	廻間III式4	漆町10群	III段階	III-3期	第4段階	伊治城跡

※ 東北辻編年の左側には、時間軸としての畿内、東海、北陸、関東の編年を対照させ、東北辻編年の右側には後北C2・D式の各段階と、本稿で扱った遺跡名を組み込んでみた。

なお、この表の縦の幅は、実年代幅（時間幅）を考慮している。年代幅は、比田井による最近の検討結果（比田井1997b）を参考にした。ただしこの表は、あくまでも現時点における推定の範囲内にあるもので、今後、弥生系土器、古式土師器、縦縄文土器の共伴事例の追加に応じて修正を要する暫定的なものである。

先に検討した永福寺山遺跡出土の塙釜式がⅢ-1期の古い段階で、それに伴う後北C2·D式は第2段階-2の終末あたりと推定されたが、後北C2·D式第2段階-2と第4段階の間には第3段階が存在していることを考慮すれば、伊治城跡の後北C2·D式第4段階と最古段階の北大I式が辻編年Ⅲ-3期の塙釜式と共に伴した事実は、後北C2·D式の変遷過程との対応面に整合する。

以上、寒川Ⅱ・永福寺山・隠川(11)・内越遺跡の4遺跡の事例に、伊治城跡の事例を加え、古式土師器の既存編年との対応を検討してみた。この結果をまとめたものが表6である。

5遺跡における共伴事例から、後北C2·D式は、畿内第V様式末期から辻編年Ⅲ-3期(布留式期Ⅲ)のあたりまで存続していると推定される。しかし今のところ、塙釜式と後北C2·D式第3段階の共伴事例は皆無であるため、後北C2·D式第3段階と塙釜式がどのように並行しているのかは判断できない。よって、後北C2·D式第3段階の資料については、今後さらに注意して検出につとめることが必要であるし、また、後北C2·D式第3段階の資料と塙釜式の共伴事例が今後増加すれば、後北C2·D式と塙釜式との対応関係はより的確に捉えられるようになると思われる。

VI まとめ

以上、秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡、岩手県盛岡市永福寺山遺跡、青森県五所川原市隠川(11)遺跡の3遺跡における事例をもとに、弥生系土器と塙釜式土器の時間的関係について検討を行った。また、これら3遺跡の事例に宮城県築館町伊治城跡と新潟県西山町内越遺跡の2遺跡における事例を加えて、後北C2·D式土器の弥生土器と古式土師器に対する編年的位置についても検討を行い、全体として以下の3点を指摘した。

- ① 後北C2·D式第2段階-1と第2段階-2の間に塙釜式Ⅱ-2期が対応し、さらに後北C2·D式第2段階-2に塙釜式Ⅲ-1期の古い段階が対応すると考えられる。
- ② 寒川Ⅱ遺跡の第2号土壙墓において後北C2·D式に共伴した羽状撲糸文壺形土器(弥生系土器)は、辻編年Ⅰ-2期からⅡ-2期あたりに並行している可能性がある。
- ③ 後北C2·D式は、畿内第V様式末期から塙釜式Ⅲ-3期(布留式期Ⅲ)のあたりまで存続していると推定される。

北東北における古墳時代前期の土器様相については、今後も解明しなければならない課題が山積している。庄内式期から布留式期にかけては、列島規模での著しい人の移動のあったことが明らかにされてきているが、後北C2·D式土器の東北地方における出土や赤穴式土器の北海道における出土もその動きの一部を構成しているものと考えられる。ある特定地域の歴史的動態を他地域との関連で考える際に必要とされるものは、言うまでもなく土器編年によって構築される各地域共通の時間軸(広域編年)である。そのような意味で、今回扱った寒川Ⅱ遺跡の弥生系土器と、一般的に赤穴式と呼称されている土器群の型式学的な検討、そして後北C2·D式と赤穴式との時間的関係の追究は今後の重要な課題と言える。現状では、北東北出土の該期の土器資料は破片資料が大半であることから、こういった諸課題に対しては、積極的な仮説提示が大切であると思われる。

筆者の力量不足ゆえ、本稿には多くの誤解等が多々みられるものと思う。先学諸氏の御叱正を賜りたいと思う次第である。

最後になりましたが、福田友之氏と浅田智晴氏には種々のご協力を賜りました。心より厚く感謝申し上げます。

註

- (1) 具体的には、ほぼ青森県域、秋田県域、岩手県域を指す。
- (2) ここでは田中新史の言う「出現期」(田中1984)と辻編年Ⅲ-3期までを古墳時代前期と表記する。
- (3) 古墳時代前期に存在する弥生土器の系譜上に属する資料を指す。具体的には、寒川Ⅱ遺跡から出土した羽状撫糸文の施された壺形土器のような資料を指すが、この資料以外の「弥生系土器」を現段階において明確にすることは難しい。
- (4) ここでは、米田編年の庄内式期Ⅰから辻編年Ⅲ-3期までの資料に対して用いる。
- (5) 新潟県巻町南赤坂遺跡と宮城県石巻市新金沼遺跡では、古墳時代前期の遺構から後北C2・D式が出土している。
- (6) この口縁部形態に注目する発想は、高橋信雄がかつて行った「Aタイプ」、「Bタイプ」の分類(高橋1982)から得たものである。なお、「後北C2・D式後葉」にも1条タイプは見られるが、これは「一般的なC2・D式」にみられるものとはかなり異なり、口唇部の直下に貼付されるものではなく、もっと下に貼付されるものである。ここではこの「後北C2・D式後葉」に見られるようなタイプのものは対象としない。いずれこの刻目貼付帯の各タイプについて考えてみたいと思っている。
- (7) 今のところ全く実証できないが、北海道のある地域においては、早い段階から2条タイプが出現している可能性があると考えている。このことが実証されれば、本稿の今回の分析は、再考が必要となる。なお、私見では、徐々に1条タイプが減少し、2条タイプが優勢となり、最終的に「後北C2・D式末」の段階では、2条タイプと0条タイプのみで大半を占めるようになり、2条タイプの一部は口縁部に2条巡らす隆起線へと変化するのではないかと考えている。
- (8) 本稿で扱う資料は数量的に非常に少ないため、構成比を求める作業としては、統計学的に問題が残されるが、少ない資料に対して厳密な姿勢を固持すると、何も分析できない状況にあるため、やむを得ないこととしてご容赦いただきたい。構成比を求める際は、個体数を確実に把握することが望ましいが、東北地方出土資料のような断片的な資料から個体数を導き出すのはかなり困難である。資料の制約上、口縁部計測法を利用できる場面も限られるし、また、肉眼による観察結果も果たしてどの程度正確であるか疑わしい。例えば、一人の製作者が同一時期に数個体の同じ様な土器を製作し、それが破片となった場合、肉眼による個体数識別にはかなりの誤差が含まれるであろう。それならば、今回のような1点の破片資料を大小にこだわらず、機械的に0.1個体と数える方法も容認されて良いと思われる。
- (9) このことは、米田編年以外の編年を認めないとするものではなく、単に名称の相違による混乱を避けるためである。
- (10) 第5号土壙墓からは、縄文時代晩期の壺形土器に類似する資料が出土しているが、ここではあえて問題にしない。
- (11) 遺構の配置から見ても、永福寺山遺跡の塙釜式は新古の2段階に分かれる可能性も十分考えられるが、散逸してしまった資料も多いことから、ここではこのことについて深く追究できない。
- (12) この資料は、中村五郎により庄内式並行に位置づけられている(中村1992)。なお、この口縁部に円形浮文の付される壺は、保管場所が不明であって、報告書には掲載されていない。現在では岩手県水沢市高山遺跡の報告書(水沢市教育委員会1978)等に掲載された白黒写真でしか見ることができない。よって、遺構に伴ったものかどうかも不明である。図は、高山遺跡の報告書に掲載された白黒写真を筆者がトレースしたものである。
- (13) この資料の保管場所は現在不明であり、報告書には掲載されていない。よって、遺構に伴ったものかどうかも不明である。拓影図は、高橋昭治と武田良夫の論文(高橋・武田1982)に掲載されたものを転載したものである。
- (14) ただし、永福寺山遺跡の装飾文様を持たない資料は辻編年Ⅲ-3期との共通点が多い。このことから、これらの塙釜式はⅢ-1期とⅢ-3期に分かれる可能性もあるが、装飾文様を持たない資料を破片で時期判別することは難しいため、これ以上の追究は行い得ない。
- (15) 1997年に青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施。1999年3月報告書刊行予定。
- (16) これら後北C2・D式と塙釜式は時期の異なるもので、ただ単に近くから出土しただけであるといった消極的な捉え方もあるが、これら両者が時期の異なるものとした場合、限定された範囲に、重複して分布しているこの状況に対し、適切な説明を加えることは難しい。詳細については報告書を参照されたい。
- (17) 比田井克仁氏と赤塚次郎氏に御教示いただいた。深く感謝の意を表したい。
- (18) 辻秀人氏に御教示いただいた。深く感謝の意を表したい。
- (19) 曲線的な文様構成が1つの完形個体において施される割合は非常に少ないし、また、本来的に曲線的なものであったとしても、それが緩やかな弧を描くものであれば、破片になった場合、大半は直線的なものに見える。よって、破片資料を見る際、曲線的な文様構成を持つものが少なくとも、それは時期判別の根拠とはならない。
- (20) 住居跡覆土の堆積状況に関する記述がみられず、土器の出土地点も示されていないため共伴として捉えることに疑問視する見解も見られる(中村1995)が、調査者である大森は、両者はほとんど床直上に近い状況で共伴したことを述べている(水澤1998)。
- (21) 大沼編年(大沼1997)に拠ると、このような北大I式は、「北大I式(古)」に位置づけられている。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
- 阿部義平 1998 「本州北部の続縄文文化—森ヶ沢遺跡を巡って—」『月刊考古学ジャーナル』No436 ニューサイエンス社
- 甘粕 健 1997 「第五章 古墳時代」『巻町史 通史編上巻』巻町

- 石井 淳 1994 「東北地方北部における続縄文土器の編年的考察」『筑波大学 先史学・考古学研究』第5号
筑波大学歴史・人類学系
- 石野博信・関川尚功 1976 『縄向』 桜井市教育委員会
- 石橋孝夫ほか 1977 『W a k k a o i 一石狩、ワッカオイ地点D地区における続縄文末期の発掘調査-』
北海道石狩郡石狩町教育委員会
- 石本省三ほか 1979 『聖山 北海道七飯郡龜田町における縄文時代遺跡の調査』 七飯町教育委員会
- 石本省三 1984 「北海道南部の続縄文文化」『北海道の研究』第1巻 考古編I
- 井上雅孝 1994 「PIXEによる続縄文土器の胎土分析」『N M C C 共同利用研究成果報文集』1
- 岩見和泰 1993 「(5) 伊治城(いじょう)跡」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
日本考古学協会1993年度新潟大会実行委員会
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 氏家和典 1972 「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号 北奥古代文化研究会
- 上野秀一 1987 「第3章 遺物」『K 1 3 5 遺跡4丁目地点5丁目地点』 札幌市文化財調査報告書XXX
札幌市教育委員会
- 上野秀一 1992 「北海道における天王山式系土器について—札幌市K 1 3 5 遺跡4丁目地点出土資料を中心に—」
『東北文化論のための先史学歴史学論集』 加藤稔先生還暦記念会
- 上野秀一 1994 「北海道続縄文文化の諸問題—北大式をめぐって—」
『第5回縄文文化検討会シンポジウム 北日本続縄文文化の実像』 縄文文化検討会
- 大島秀俊 1991 『小樽市蘭島餅屋沢遺跡』 小樽市埋蔵文化財調査報告書第2輯 小樽市教育委員会
- 大沼忠春 1978 「東北地方北部の後北式土器について」『考古風土記』第3号
- 大沼忠春 1982a 「後北式土器」『縄文土器大成 5 続縄文』 講談社
- 大沼忠春 1989 「続縄文式土器様式」『縄文土器大観 4 後期・晚期・続縄文』 小学館
- 大沼忠春 1997a 「手宮洞窟の時代—続縄文時代の北海道—」『手宮洞窟シンポジウム記録集』 小樽市教育委員会
- 大沼忠春 1997b 「8・9世紀の土器—口縁部に沈線文のある甕形土器」『蝦夷・律令国家・日本海—
シンポジウムII・資料集—』 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
- 大森勉・横山勝栄ほか 1983 『内越遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第33号 新潟県教育委員会
- 木村 高 1994 「東北地方—後北C2・D式土器、北大I式土器の周辺—」『北海道考古学』第30輯 北海道考古学会
- 木村 高 1996 「青森市玉清水(1)遺跡出土の後北式土器」『青森県考古学』第9号 青森県考古学会
- 日下和寿 1997 『山形村丹内I遺跡発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第13冊 岩手県立博物館
- 小林克ほか 1988 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I
—寒川I遺跡・寒川II遺跡—』 秋田県文化財調査報告書第167集 秋田県埋蔵文化財センター
- 小林 克 1991 「農耕社会に南下した狩猟採集民—秋田県能代市寒川II遺跡の事例—」
『月刊考古学ジャーナル』No341 ニューサイエンス社
- 小林 克 1992 「「東北続縄紋式」学説史的覚え書き」『北奥古代文化』第22号 北奥古代文化研究会
- 小林 克 1993a 「東北北部の続縄紋期の土器」『二十一世紀への考古学』 櫻井清彦先生古稀記念会
- 小林 克 1993b 「江別C2式土器の本州分布をめぐって—「東北続縄紋式」の視点から—」
『先史考古学研究』第4号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 古墳時代土器研究会 1997 『土器が語る—関東古墳時代の黎明—』 古墳時代時研究会
- 斎藤邦雄 1993 「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』第5号 岩手考古学会
- 佐藤信行 1976 「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』 東北考古学会
- 佐藤信行 1983 「宮城県内の北海道系遺物」『北奥古代文化』第14号 北奥古代文化研究会
- 佐藤信行 1984 「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究』第1巻
- 佐藤則之 1992 「IV.第18次調査」『伊治城跡』 築館町文化財報告書第5集 築館町教育委員会
- 鈴木正博 1990 「栃木「先史土器」研究の課題(一)」『古代』第89号 早稲田大学考古学会
- 鈴木 信 1998 「(3) 後北C2・D式の分類案」『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)』
(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第128集 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 鈴木素行 1992 「7 弥生時代遺物の編年位置」『武田V-1991年度武田遺跡群発掘調査の成果-』 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第7集 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社
- 鈴木素行 1994 「4 弥生時代遺物の編年位置・II」『武田V-1993年度武田遺跡群発掘調査の成果-』 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第9集 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社
- 鈴木素行 1998 「武田石高遺跡における十王台式土器の編年について—「十王台式」分析のための基礎的な作業-」
『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告15
- 高橋昭治・武田良夫 1982 「岩手県における後北式文化」『北奥古代文化』第13号 北奥古代文化研究会
- 高橋誠明 1998 「角塚古墳前夜の大崎平野」『角塚古墳シンポジウム 最北端の前方後円墳』 胆沢町教育委員会

- 高橋信雄 1982 「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器の対比」『北奥古代文化』第13号 北奥古代文化研究会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望－東国神門五号墳の調査と関連して－」『古代』第77号 早稲田大学考古学会
- 田中 敏 1987 「福島県内における古墳時代前期土器群の様相について」『福島県立博物館紀要』第1号 福島県立博物館
- 千代 肇 1965 「北海道の続縄文文化と編年について」『北海道考古学』第1輯 北海道考古学会
- 次山 淳 1992 「塙釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 埋蔵文化財研究会
- 辻 秀人 1993 「東北南部の古墳出現期の様相」『シンポジウム2東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会1993年度新潟大会実行委員会
- 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年その1 会津盆地」『東北学院大学論集』歴史学・地理学26号 東北学院大学学術研究会
- 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年その2」『東北学院大学論集』歴史学・地理学27号 東北学院大学学術研究会
- 津嶋知弘ほか 1997 『永福寺山遺跡－昭和40・41年発掘調査報告書－』 盛岡市教育委員会
- 寺沢 薫 1980 「大和におけるいわゆる第5様式土器の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』 奈良県文化財調査報告書第34集 奈良県教育委員会
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県教育委員会
- 豊田宏良 1991 「第二節 第I 黒色土層出土の遺物」『祝梅川山田遺跡における考古学的調査』 千歳市文化財調査報告書X VI 千歳市教育委員会
- 中村五郎 1982 「続縄文土器編年をめぐる諸問題」『北奥古代文化』第13号 北奥古代文化研究会
- 中村五郎 1990 「弥生土器から土師器へ」『福島考古』第31号 福島県考古学会
- 中村五郎 1992 「古式土師器・続縄文土器編年をめぐって」『北海道考古学』第28輯 北海道考古学会
- 中村五郎 1995 「弥生土器・続縄文土器・古式土師器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 丹羽 茂 1985 「IV 考察 今熊野遺跡における方形周溝墓群とその集落」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』 宮城県文化財調査報告書第104集 宮城県教育委員会
- 芳賀英実 1997 「石巻市新金沼遺跡」『平成9年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』 宮城県史跡整備市町村協議会
- 比田井克仁 1991 「西相模の弥生後期から古墳前期の土器様相」『足もとに眠る歴史 西相模の三・四世紀』 東海大学文学部・東海大学校地内遺跡調査団
- 比田井克仁 1994 「南関東における庄内式併行期前後の土器移動」『庄内式土器研究V-1』 庄内式土器研究会
- 比田井克仁 1997a 「弥生時代後期における時間軸の検討－南武藏地域の検討を通して－」『古代』第103号 早稲田大学考古学会
- 比田井克仁 1997b 「定型化古墳出現前における濃尾、畿内と関東の確執」『考古学研究』第44巻第2号 考古学研究編集委員会
- 藤沢 敦 1996 「仙台平野における古墳の変遷－その断絶と画期をめぐって－」『考古学と遺跡の保護』 甘粕健先生退官記念論集 甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 前山精明 1993 「新潟県巻南赤坂遺跡発掘調査の概要」『1993年度遺跡調査報告会』 北海道考古学会
- 前山精明 1994 「新潟県巻南赤坂遺跡をめぐる諸問題」『第5回縄文文化検討会シンポジウム 北日本続縄文文化の実像』 縄文文化検討会
- 水澤幸一 1998 「兵衛遺跡・四ツ持遺跡」 中条町埋蔵文化財報告書第15集 中条町教育委員会
- 水沢市教育委員会 1978 「高山遺跡」 岩手県水沢市文化財報告書1集 高山遺跡調査委員会
- 森田知忠 1967 「北海道の続縄文文化」『古代文化』第19巻第2号 古代學協會
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号 石川考古学研究会
- 米田敏幸 1992 「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器 雄山閣
- 米田敏幸 1994a 「庄内・布留式期の畿内と関東」『庄内式土器研究V』 庄内式土器研究会
- 米田敏幸 1994b 「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究VII』 庄内式土器研究会